

1 右翼と左翼との見解 135p

・われわれが第一歩をふみしめるのは、第二歩をふみだすためである。保守主義者は第一歩をふみしめることを知って、第二歩をふみだすことを忘れている。

日本の無産階級運動は、ちようど今、第一歩をふみしめた。われわれは第二歩をふみださねばならぬ。

※時代的背景…1917年ロシア革命。世界的な変革と動乱の時代へ

①この書の発表時期は、「前衛」1922（大正11）年7・8月合併号

- ・山川は、第一次共産党結成に参加。7月第一次共産党結成の直後に発表。
- ・1923年6月 第一次共産党検挙事件(堺利彦、山川均、荒畑寒村ら起訴)
- ・同年9月 関東大震災(大杉栄虐殺)

※「粗製濫造」（『寒村自伝』）的に結成。数十人の共産主義的分子の非合法グループ以上のもの  
で はなかった。翌23年6月に主要メンバー29名が検挙され、壊滅状態に。

※第2次大戦前の革新系政治団体(主なもの)

- ・◎車会党（1882-1883）→（結社禁止）…失業した人力車夫を中心に
- ◎東洋社会党（1882-1883）→（結社禁止）…財産の均等化などを掲げ、党員は数名
- ◎社会民主党（1901）…日本最初の社会主義政党。創立者は、片山潜、安部磯雄、木下尚江、幸徳秋水、河上清、西川光二郎の6名。2日後に禁止。  
→社会平民党（1901）→日本社会党（1906-1907）
- ◎日本共産党（1921/22-1924）→日本共産党（1926-1929/1935）→
- ◎農民労働党（1925）→労働農民党（1926-1928）
- ◎日本農民党（1926-1928）／◎社会民衆党（1926-1931）
- ◎日本労農党（1926-1928）／◎日本大衆党（1928-1930）／◎労働者農民党（1928）
- ◎全国大衆党（1930-1931）／◎全国労農大衆党（1931-1932）／◎社会大衆党（1932-1940）
- ◎勤労国民党（1940）／◎日本無産党（1937）

②世界の共産党結成時期…

- ・コミンテルン(共産主義インターナショナル)1919年3月に結成
- ・1920年第二回大会で21箇条の加入条件採択(共産党への党名変更、各国は支部扱い、世界的に社会主義運動の大分裂へ)  
※この時までにはスウェーデン、アメリカ、ドイツ、デンマーク、オランダなどが結成
- ・1921年結成…中国、フランス、カナダ、スイス、ホルトガル、ベルギーなど
- ・1922年結成の共産党…日本、スペイン、ブラジルなど
- ・1924年 レーニン死去

※共産党結成が第一歩のはずなのだが、山川は「第二歩は“解党”に動く」→党内論争にとどまらず、日本における社会主義運動の路線問題に発展→労農派・講座派論争に

2 少数者の運動から 136p

- ・無産階級の運動は、まず大衆にさきだって階級的にめざめた、少数者の運動からおこってくる。
- ・階級意識は…

①資本主義社会には、搾取者の階級と被搾取者の階級とが対立しているという、生活の 現実がわれわれの頭に映じた影である。

②非凡な天才のみが意識することのできるむつかしい理屈ではなくて、いやしくも資本主義の社会に生活している以上は、無産階級全体の頭のなかに、一様にわいてくる意識である。

③まず少数の人びとの頭に、はっきりと映じる。そこで階級意識にめざめた無産階級のうちの少数者の運動がまず現れる。

- ・少数の先覚者は、まず資本主義の精神的の支配から脱して、完全に思想の独立をしなければならぬ。

そこでいきおい、自分の周囲の大衆とは、ある程度まで思想的にわかれなければならぬ。

※「大衆から思想的にわかれた」少数者が結束して、ちいさいながらも、ぼんやりとした、かたまりになる。

- ・この時代は少数の先覚者が、まず自分自身を、はっきりと見さだめねばならぬ時代であった。
- ・階級的の団結も組織もない混沌とした無産階級の大衆のうちに、…戦闘的分子が生まれ、この分子がなんらかの形で結合したときに、無産階級運動は、まさにその第一歩をふみしめたものである。
- ・日本の無産階級運動は、この第一歩をふみしめた。…われわれは第二歩をふみださねばならぬ。

### 3. 社会主義運動の第一期 138p

- ・無産階級運動の二つの方面…社会主義運動と労働組合運動
- ・日本における今日までの社会主義運動は、ごく少数の運動であった。  
日本の社会主義は今日にいたるまで、一度もまだ大衆的の運動となつたことはない。
- ・過去 20 年間における日本の社会主義運動は、まず自分を無産階級の大衆と引き離して、自分自身をはっきりさせた時代であった。
- ・これは…独立した無産階級の考え方と、独立した無産階級の思想と見解を築くためには、必要な道程であった。
- ・日本の社会主義者ほど、明白に資本主義の撤廃という最後の目標のみを見つめていたものはない。けれどもこの最後の目標を見つめていたために、かえってこの目標に向かって前進することを忘れていた。
- ・(革命)以外の、いっさいの当面の問題はつまらない！これが過去 20 年間における、われわれ社会主義者の態度であった。

### 4. われわれは誤っていた 140p

- ・潔癖な「革命的」の態度、革命の翌日を空想して気焰、巡查を相手に「革命的」の行動、
- ・無産階級の大衆と離れた程度、虚無主義者の理想…、われわれはこの誤謬におちいつていた。
- ・第二歩を踏み出すことを忘れていた。次の一歩をふみだすことを忘れる保守主義者の誤謬におちいつていた。
- ・過去におけるわれわれの誤りを、大胆率直に認めたい。

### 5. 労働組合運動はどうか 143p

- ・組合運動も同じことである。日本の組合運動は…労働階級のうちのごく少数の運動である。
- ・分量が大きいには相違ない(当然のこと)。本来の性質からいって、社会党よりもいっそう包容的。
- ・今日の日本の組合運動は、労働階級の大衆の運動というよりも、…先覚者の運動たる性質を多分にもっている。鮮明な階級意識をもち、思想の徹底して純化している
- ・かような点では、日本の社会主義運動と労働組合運動との間には、いちじるしい類似がある。

#### ※戦前の労働組合

- ・労働組合期成会…1897年7月結成。高野房太郎、片山潜、澤田半之助など。会員最大で5700人。1900年に治安警察法が施行し、1901年に解散した。
- ・友愛会…1912年結成の労働者団体。相互扶助が目的で、性格は共済組合。急増した労働争議に関係し、次第にその性格を変更させ、労働組合としての性格が強くなり(左翼化)、1919年には大日本労働総同盟友愛会に(反社会主義てき立場から社会主義的に)、1921年には日本労働総同盟に改称。関東大震災後、内部で共産主義者と社会民主主義者との間の対立が先鋭化した。総同盟は日本共産党の党員を除名し、1925年に総同盟は二つに分裂。
- ・後に大日本産業報国会運動に合流。戦後の日本労働組合総同盟に。産別会議(共産党系と対立)、1950年総評が結成される。

### 6. われわれの新しい標語 145p

- ・(第一歩は、目標を見定めること)次の第二歩は、大衆を動かすことを学ばねばならぬ。  
はるかの後方に残されている大衆の中に、ふたたび、ひきかえしてくることでなければならぬ。
- ・「大衆の中へ！」は、日本の無産階級運動の新しい標語でなければならぬ。  
この新しい標語を実現するためには、日本の無産階級運動—社会主義運動と労働組合運動—は、つぎのごとき意味で、方向転換の必要がある。

## 7. 大衆は何を要求しているか 146p

- ・無産階級の大衆が、現に何を要求しているかを的確に見なければならぬ。  
そしてわれわれの運動は、この大衆の当面の要求に立脚しなければならぬ。
- ・資本主義の撤廃を目標とするが、…(大衆が)目前の生活の改善を要求しているならば、当面の運動は、この大衆の現実の要求を基礎としなければならぬ。
- ・これは革命主義から改良主義への墮落であろうか。決してそうではない。大衆の行動を離れては革命的な行動はなく、大衆の現実の要求を離れては、大衆の運動はないからである。

## 8. 政治の否定と政治的対抗 147p

- ・したがって無産階級の運動は、ブルジョアの政治に対しても、決して無関心であってはならぬ。  
民衆の生活は、政治から直接の影響をうける、…税金、金利政策、物価、政府の収入・支出、海軍の縮小と失業防止、賃金、教育費、云々。
- ・ある人はいうだろう。政府はブルジョアの政府である。われわれは政治に何ものをも期待せぬ、と。  
われわれに必要なものは、ブルジョア政府の手から、すべて闘って取らねばならぬ。
- ・(不潔な蠅は、追わねばならぬ)ブルジョアの政治を度外視するのではなく、ブルジョアの政治と戦わねばならぬ。(戦わぬものは)ブルジョアの政治を援けている者である。
- ・ブルジョアの政治に対して、無産階級の政治を対立させなければならぬ。
- ・(変化)今年のメーデー…労農ロシア承認の要求、生活権の要求、失業問題解決の要求、過激法案反対の要求…これらはみな国家にたいする労働階級の要求であるから、政治上の要求であり、無産階級の政治的運動であるといつてよい。

## 9. 全線の方向転換 151p

- ・(第一歩は)思想的に革命主義者となった、まだ大衆を知らぬ革命主義者であり、大衆と共に動くことを知らぬ革命主義者であった。革命の思想を知って、革命の運動を知らぬ革命主義者であった。
- ・(第二歩は)大衆を動かすことを学び、そして大衆を動かす、  
(このことを学んだとき)初めて革命の思想が革命の運動となるのである。
- ・資本主義の支配と権力との発露するあらゆる戦線において、無産階級の大衆の現実の生活に影響するいっさいの問題にたいしてたんに否定的態度から積極的闘争の態度に移らねばならぬ。  
これが無産階級運動の、全線にわたって行わねばならぬ方向転換である。
- ・「大衆の中へ！」。しかしながらわれわれはそれと同時に、なお資本主義の精神的支配の下にある大衆の中に分解してしまうてはならぬ。

## 【山川への批判】Wiki※共産党系からする批判

日本の社会主義運動は平民社時代の末期に議会政策派と直接行動派に分裂して以降、直接行動派の流れを汲む観念的で急進的なサンジカリズム的な傾向を根強く残していた。こうした状況が早急に止揚されなければならない時期を迎えていたことは明らかで、その限りでは山川の問題意識は正当であった。しかし、山川が指し示した「転換」は日本の社会主義運動の現状を脱却し、正しい「方向」に導くものであったであろうか。

日本の社会主義運動の歴史と現状を踏まえて、この時、提起されるべきは、これまでのサンジカリズム的な傾向を徹底的に克服し、真にマルクス主義的な立場に立ったプロレタリア政党(当時の状況にあっては合法・非合法の組織と活動を結合した)の結成をめざして、すべての革命的な分子を糾合

し、そのための理論的、組織的な準備を開始することであつたろう。

ところが、山川の提起した方向はそうではなく、当時の社会主義運動や労働運動の直面していた欠陥を単に「前衛たる少数者」が「大衆」と遊離していることにのみ還元し、「前衛たる少数者」（山川は彼らを「思想的には徹底し純化していた」かに言うが、決してマルクス主義的に「徹底し純化していた」わけではなかったのだ）と「大衆」との結合を図るとの美名の下に、革命的な分子を個々バラバラに、あるいはせいぜい活動家グループとして、「大衆の当面の利害を代表する運動」すなわち労働組合運動や改良主義的な政治運動の中に追いやり、埋没させて、この貴重な勢力をそこに分散、解消してしまうというものでしかなかった。

「前衛たる少数」と「大衆」との結合——社会主義運動の発展と勝利にとって、これが不可欠なこととは言うまでもない。しかし、この「前衛たる少数者」がマルクス主義的な綱領や規約に基づく革命政党に組織されていてこそ、「大衆」との結合が本当の意義をもつのであって、革命的分子が個々バラバラに存在する「前衛たる少数者」では余り意味がないのである。ところが、山川は社会主義運動におけるプロレタリア革命党の役割や意義を少しも理解していない。いたずらに「大衆」や「大衆運動」との結合を唱える前に、それとは相対的に独立した形で意識的に革命政党を建設していくという独自の課題のあることを彼は知らないのだ。

山川の主張は日常的な組合運動や改良闘争を通じて社会主義的な革命運動を発展させるという自然発生性に跪く経済主義の一種に他ならない。この「方向転換」論の延長上に「共同戦線党」論も出てくるのだが、第一次共産党が弾圧で解体させられた後、「根こそぎ解党」を唱えて解党主義に走り、党の再建に腐心する荒畑寒村の協力要請をにべもなく拒否したのもまたその必然的な帰結であった。